様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　　５月　　１日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520287
研究課題名（和文）　ジェイムズ・ジョイス初期作品から『ユリシーズ』に至る人間身体の表象
研究課題名（英文）　A Study on the Images of Body in James Joyce’s Works from *Dubliners* to *Ulysses*

研究代表者
坂内　太（ SAKAUCHI　FUTOSHI ）
早稲田大学・文学学術院・准教授
研究者番号：60453990

研究成果の概要（和文）：ジェイムズ・ジョイスの初期の各短編から、『若き芸術家の肖像』『ユリシーズ』に至る諸作品を研究対象とし、この作家が膨大な人間群像の描写を通じて特殊な身体表象を展開したことを明らかにした。特に＜変容の失敗＞のモチーフが多様な文体的テクニックの変遷の根底に持続的に存在し続けたこと、また、同時代の他の詩人・劇作家達が取り組んだ浄罪と変身のモチーフを批判継承しながら、人間の身体的・精神的変身のモチーフを肯定的に飛躍させたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This project was intended as an investigation of aesthetic representation of human bodies in James Joyce’s *Dubliners*, *A Portrait of the Artist as a Young Man*, and *Ulysses*. Having focused on the theme of confession, purgation, and dramatic transformation, I made it clear to what extent the writer innovated on the themes in his writings in a very positive way.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：モダニズム文学　身体論　ジェイムズ・ジョイス

１．研究開始当初の背景

ジェイムズ・ジョイスが 1922 年に出版した『ユリシーズ』がモダニズム文学に大きな影響を与えたことは、既に広く認められている。また、主に活字文化に関する作家と時代との間の影響関係を中心としたこの作品の間テクスト性を巡る研究は豊富になされてきた。しかしその一方で、ジョイスが重きを置く人間の身体の表象について、活字化しにくい人間の身体的な在り方と時代との関わりが、文学表現の極致ともみなされた『ユリシーズ』の中で重要な問題となっていることは、ほとんど論じられてこなかった。本研究は、この点に着目して、ジョイス研究における身体論的研究という新しい研究領域の可能性を示すことを目的として出発した。

本研究の研究代表者は、ジョイスの出身校であるアイルランド国立大学ダブリン校（University College Dublin）で、アイルランド文学・演劇作品における女性の表象をテーマに博士論文を執筆し、社会規範から「逸脱」した女性の表象や、メディアによる女性の「怪物化」などの問題を分析した。その過程で芸術作品における人間の身体イメージの重要性に着目し、博士論文以後の更なる研究の為には、互いに隣接し影響を与え合うジャンル（戯曲、小説、詩、美術、マス・メディア等）を横断する越境的なリサーチを行う必要性を痛感するに至り、アイルランド文化の諸相における身体イメージの多領域横断的な検証に対する関心を深めてきた。アイルランドでは、(『ユリシーズ』の翻案戯曲の上演を含む）舞台芸術の現場に、演出補佐やアドバイザー、劇場写真家などとして持続的に関わり、身体芸術が記録されてアイルランドのマス・メディアに流布する過程を観察してきた。また、現在、アイルランドで活躍する作家、劇作家、詩人達へのインタビューを重ね、文学・演劇テクストに現れる人間の身体のイメージが、如何に同時代のテクノロジーと身体との緊張関係を反映しながら構築されているかを目の当たりにしてきた。また、現在の所属研究機関において、こうした芸術・メディアの諸ジャンルを視野に入れつつ、学際的な身体論・身体表象論研究に携わってきた。本研究を展開しようとする背景には、以上のような研究活動やフィールドワークの蓄積があった。

ジョイス作品に関しては、本研究に先立つリサーチにおいて『ユリシーズ』を取り上げ、身体表象を巡るジョイスの特殊な傾向を指摘した。より具体的には、主に以下の点を考察した。

先ず、百科全書的に無数の個別具体的な事物の詳細に言及することで成立している『ユリシーズ』のテクストの中で、特に人間身体、及び（人間の身体的有り様に影響を与える）テクノロジーやメディアに関する箇所を詳細に検討した。

次に、この作家がなぜ、どのようにして人間身体（及びテクノロジー）の表象を、重要な要素として作品に導入したか、そうした表象の、『ユリシーズ』各章における多様な有り様を検討した。20 世紀初頭に構想され、第一次世界大戦後に完成された『ユリシーズ』の中では、テクノロジーの脅威と、大戦という大量殺戮技術の実践に対する反感、そうしたテクノロジーを前にした個々人の身体の無力さとが繰り返し暗示されている。その一方で、ジョイスが友人に書き送った計画表等から明白なように、『ユリシーズ』の各々の章には、「腎臓」「心臓」「運動器官」「肉体」「肺」「生殖器」「食道」「脳」「子宮」「神経」等の身体器官がキーワードとして付与されており、この長編小説が人間身体の統一的調和や見取り図として構築されている。この点から、身体とテクノロジーの緊張関係を身体表象論として『ユリシーズ』のテクストの中に探求することは、妥当かつ有意義なリサーチであると考えられた。

『ユリシーズ』における身体的統一の調和という点に関しては、ジョイスが『ユリシーズ』を構想した時期に残している執筆計画書、及び各種のファクシミリ版原稿を検討し、執筆計画書のそれぞれに書き込まれている人間の身体イメージの構想を比較検討した。

『ユリシーズ』における具体的な身体表象に関しては、作中で描写されている登場人物たちの身体的な有り様とそれに関連する表現を、作品の全ての章に渡って抽出した。この作業は、『ユリシーズ』における重要な登場人物（レオポルド・ブルームやモリー・ブルーム、およびスティーヴン・ディダラス）の身体イメージに限らず、この作品の全ての章における多種多様な登場人物たちについて実施した。このリサーチについては、ペンギンブック版 *Ulysses* の註釈者としてアイルランドの文化的・歴史的コンテクストにおける『ユリシーズ』研究の斬新な地平を開き、「人間の心身の問題を解決するガイドブックとしての『ユリシーズ』」という新たな観点から作品分析を続けている Declan Kiberd 教授(University College Dublin)から専門的なフィードバックを得るように努めた。

以上の結果として、様々な登場人物達に関する豊富な身体描写と比較して主人公の身体に関しては寡黙が貫かれ、身体的存在の確証が読者に与えられずにいることなど、『ユリシーズ』において人間身体の表象が占める特異性を明らかにした。本研究は、こうした予備的なリサーチを発展的に継承したものであった。

２．研究の目的

本研究は、ジェイムズ・ジョイスの初期短編集『ダブリン市民』、中編小説『若き芸術家の肖像』、及び長編小説『ユリシーズ』を主たる対象とし、この作家による特殊な身体表象を分析することを目的とした。研究の目的は、より具体的には、身体表象を中軸とした上記作品の相互に見られる間テクスト性の検討、さらには先行する文学・演劇からの影響関係とジョイスによる身体表象の独自性の検討にあった。

この作家が、1914 年から 1921 年に渡って書き続けた『ユリシーズ』が、単に同時代文学のみならず、欧米のモダニズム文化に衝撃をもたらしたことは明白であり、この長編小説が世界大戦による大量殺戮と国家的な荒廃の最中に書かれる一方で、作品中にカタ

ログ式とも言えるほどの包括的な人間群像を盛り込み、平穏な日常の身体性を活写していることを考慮すると、この作品における人間身体の表象に関する研究がほとんどなされてこなかった事実は奇異であり、従来のジョイス研究の盲点とも言える。また、こうした『ユリシーズ』における独自な身体表象に相当するものが、初期、中期の諸作品に見られないかどうかを検討することも、この作家独自の身体表象を明確にする点で不可欠なリサーチとなった。

３．研究の方法

先ず、ジェイムズ・ジョイスの『ダブリン市民』、『若き芸術家の肖像』、『ユリシーズ』の中で描写されている登場人物の身体的な有り様とそれに関連する表現を、作品の執筆時期に沿って抽出し、データベース化する作業を進めた。また、身体の表象に関わる様々な事象・芸術作品、登場人物達の日常を取り巻く個別具体的な日用品や電気機器、既存のテクノロジーの表象、或いは人間の生活に影響を与えるものとして新たに台頭してきたテクノロジーやメディアの表象その他に着目し、個別具体的な事物・事象のデータを収集・検討した。

次に、上記の様々な表象に関連するかたちで言及、暗示される先行文学テクスト（19 世紀末から 20 世紀初頭におけるアイルランド文学・演劇・詩のテクストを中心とする）に着目し、ジョイスによる表現との比較検討を試みた。特に参照点としては、ジョイスが自信の作品中にメタ小説的に包摂している W.B.イェイツ、グレゴリー夫人、J.M.シングの諸作品に注目した。こうした比較検討で明白となった『ユリシーズ』の第 15 挿話における身体表象の特徴に関しては、2010 年度に論文（Body and Theatre in ’Circe’ of James Joyce’s *Ulysses*）としてまとめた。

このリサーチにおいては、精神的な危機に直面して心身の調和を失って自閉的になった人間、倫理的に破綻した人間、事故で伴侶を失って抑鬱的になった人間などが、アイルランド・カトリック的な救済と浄化の文化の中では、ついにより良き者へと変容・変身できないことを描いてきた経緯を検討した。また、ジョイスが探求した変容の「不可能性」については、歴史的考察、道徳的考察、文学的考察、視覚文化的考察の多岐に及ぶ点を考察した。

さらに、これらの登場人物の表象を包括的に比較検討することで、のちの『ユリシーズ』に見られるような、人間の身体性の衰弱と変身のモチーフが、すでに初期作品群に認められるかを検討した。その結果、『ユリシーズ』では、当時進展しつつあった第一次世界大戦の戦況を背景に、人間の身体的存在が消滅しかねない脅威を暗示しつつ、初期・中期に執着していた変容不可能性の否定的なモチーフが、逆に変容・変身可能な肯定的なモチーフへと転じていることを明らかにした。この点では、こうした革新的展開がジョイスの作家としてのキャリアの中で存在したことを明確化し得たが、その契機をもたらした時期の特定や中核の原因に関してはさらなる探求が必要なこともまた確認した。

上記のリサーチを続ける内に、身体表象の問題がさらに大きな時代的枠組みの中で重要な位置を占めることが明らかになってきた。人間身体の表象を軸に 19 世紀末、及び 20 世紀初頭の先行テクストを検討する過程で、とりわけ「変身・変容」のモチーフがジョイス作品に影響を与えた可能性に着目して、『ダブリン市民』の各短編小説から『ユリシーズ』に至る諸作品を精査した。また、こうしたモチーフのジョイス独特の変形・翻案に関しては、オスカー・ワイルドやエルンスト・ブロッホによる芸術論を重要な参照点とした。先行テクストとジョイス作品との間の共通項と差異については、2011 年度に論文（Theatre as a Medium: the Idea of Transformation in Irish Theatre in Early Twentieth Century）としてまとめた。

以上のリサーチの過程で、ジェイムズ・ジョイスにおいては、その作家活動の最初期の短編から、すでに特殊な身体論的問題が扱われており、伝統的な散文形式や教養小説的表現、或いはイングランド文学の歴史に即した緻密なパロディー形式など、執筆時期の各々に行った文学実験の多様性にもかかわらず、そうした問題意識やモチーフが首尾一貫して現れている可能性が生じてきた。この点に関して、ジョイス諸作品相互における間テクスト性のリサーチを進め、相互連関について詳細に検討した上で論文（Confession Box and Theatre in James Joyce’s Early Writings）として発表した。

上記の問題を検討する過程で、ジョイスが展開した身体表象と、それと密接に結びついた芸術の社会的機能に関する作家の思想が、19 世紀末以降のアイルランド文学・演劇から今日のアイルランド文学・演劇に至る長いスパンでの重要な芸術観と深い関連があることが明らかとなり、その問題をさらに検討した。特にアイルランドのカトリック文化における精神の変容の問題と、不特定多数の市民が参与する演劇文化における精神的変容の問題に対するジョイスの批評的なアプローチに注目して、この問題に対する端緒的な成果を口頭発表（Wounds and Cures: Guilt and Theatrical Transformation in Joyce’s Writings）としてまとめた。ジョイスの作品中で直接的な言及、乃至は暗示されている身体の表象に関わる様々な事象・芸術作品その

他に着目し、個別具体的な事象・芸術作品等の視覚的なデータを収集・分析する作業は、本研究に先立つ事前の『ユリシーズ』研究に引き続き行い、ジョイスの初期作品から中期の小説を含め、持続的な情報量の拡張に努めた。こうしたデータベースの拡張・補完作業は今後のさらに発展的な研究に活用できるものと考えられる。

４．研究成果

本研究においては、アイルランドの作家ジェイムズ・ジョイスが、1914 年から 1921 年に渡って書き続けた『ユリシーズ』をはじめとして、ジョイス諸作品における身体イメージの分析と検討を重ねてきた。ジェイムズ・ジョイスによる特殊な身体表象の有り様を浮き彫りにするために、初期短編に頻出する＜変容の失敗＞のモチーフを丹念に検証し、このモチーフが中期の作品『若き芸術家の肖像』においても、ジョイスが作家的なテクニックを変えながらも持続的に探求し続けていることを明らかにした。

また、J・M・シングのような他のアーティストが取り組んだ変身・変容のモチーフを批判継承しながら、この作家の代表作であり、西洋モダニズム文学の記念碑的作品である『ユリシーズ』においては、人間の身体的・精神的変容のモチーフを肯定的に飛躍させたことを明らかにした。また、単に文学の枠を超えて欧米のモダニズム文化に大きな衝撃をもたらしたこの長編が、第一次世界大戦の大量殺戮兵器による大規模な破壊と国家的な荒廃の最中に書かれる一方で、作品中に膨大な目録とも言える人間群像を盛り込み、それらの人々の日常的な身体性を肯定的にとらえていることを明確にした。

本研究の当初の目的は達成されたが、さらに広範囲な研究に対する端緒も開けた。とりわけ、ジョイス作品の身体表象と連関させながら、アイルランド・モダニズムの黎明期を形成した W.B.イェイツの諸作品、また同時代演劇運動における身体表象の諸相とその波及的な影響について検討する展望が得られた。また、W.B.イェイツ、ジェイムズ・ジョイス作品による種々の身体論的モチーフを受け継ぎ、発展させたサミュエル・ベケットの諸作品を検討することにより、アイルランド・モダニズムの後期における身体表象を分析する展望も得られた。本研究の成果を、こうしたアイルランド・モダニズム文学の黎明期から後期までを貫く身体表象の特異性を明確化する研究に応用する十分な足がかりが得られた。

本研究を通じて、海外研究協力者である Declan Kiberd 教授(University College Dublin)から専門的なフィードバックが得られるように努めたが、その過程で当該分野の研究書であり、本研究上の重要な参考文献であった同教授による著作 *Ulysses and Us*: The Art of Everyday Living (Faber & Faber, 2009) を翻訳して日本に紹介するという派生的な成果も得られた（『ユリシーズと我ら―日常生活の芸術』水声社、2011 年)。

本研究の各段階を振り返ってみて、種々の批評理論の投入が中心を占めた過去数十年のジョイス研究と比して、身体性というテーマに特化した研究を行うことで、ジョイス作品における身体表象論という新たなアプローチの考察と形成に一定の寄与をしたと考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

1. 坂内　太 Confession Box and Theatre in James Joyce's Early Writings. 演劇映像学 2010（早稲田演劇博物館グローバル COE 紀要）第五集。査読無。2011 年 3 月。pp. 61-70.

2. 坂内　太 Theatre as a Medium: the Idea of Transformation in Irish Theatre in Early Twentieth Century. 早稲田大学大学院文学研究科紀要第 56 輯第三巻。査読無。2011 年 2 月。pp. 115-127.

3. 坂内　太 Body and Theatre in 'Circe' of James Joyce's *Ulysses*. 演劇映像学 2009（早稲田演劇博物館グローバル COE 紀要）第三集。査読無。2010 年 3 月。pp. 251-261。

〔学会発表〕（計１件）

1. 坂内　太 Wounds and Cures: Guilt and Theatrical Transformation in Joyce's Writings. IASIL JAPAN The 28th International Conference. 2011 年 10 月。京都同志社大学。

６．研究組織

(1)研究代表者

坂内　太（SAKAUCHI FUTOSHI）
所属研究機関：早稲田大学
部局：文学学術院
職名：准教授
研究者番号：60453990

(2)研究分担者

なし。

(3)連携研究者

なし。